

賃貸物語 (10)

「言うこと聞かない」児童虐待死

小野 友貴枝

はじめに

三木克己みきかつみは、貸家探しをしていたわけではないが、偶然、借家の塗装に通っているうちに、その家が空いていることを知った、その大家は、新しい借家と、三十五年も前に建てた貸家の二種類を持っていた。古い借家は、昭和の年代に流行ったもので、庭付きの一七坪の平屋である。古いと言っても大家の手配がいいのか屋根のペンキも外装もしっかりしている。四棟が立つ借家の外装、家の扱いや修繕が丁寧であることがよく分かる。こんな大家なら、居住者の入居が長いではないかと、想像できる。

入居者が出て行った後の塗装は、いろんなところで頼まれるが、この借家ほど、しっかり改装してほしいと頼まれたことはない。

(1)

大家の大澤未知子は、手ぬぐいを取りながら、話し

はじめた。貸家でさえ大切にするのだから、きつと母屋の手入れもしているのだろう、と塗装業の三木は想像を膨らませた。その思いが伝わったのか、

「いいえ、家の方はなおざりですよ、ここは売り物だからです。普通天井は合成の板が繋ぎ合わさっているだけです。煤を払うだけです、ニスやワックス掛けはしませんよ」

「天井まで塗り替える人初めてです。お客さんすぐにつきますでしょう」

三木はお世辞でなく本心から言った。

「天井のニスを塗るのは訳があります。この家を建てるときに、同居していた義母の知り合いに宮大工がいるから使つてと言われた。その人に頼んだら、材料費は安くてびっくり、大工が貯えていた材料を使わして貰つてこの借家は出来ている。天井は桜、床は樺を使ったので、恐れ多くも、この四軒は、銘木を使つて建てたと言える。きつと桜の天井などほかにないかもしれません、床柱も全部樺と各部所がいい木材を使つていので一七坪の小さな家だが、長持ちしています」

さらに、「シロアリ検査の方が床下に潜つてびっくりします。凄いな貸家だつて。だから普通に使っているのに、少しも傷まない、もちろん、壁やトタンの手入れ

も年数が来れば手入れしてはいます、そのせいか柱の光も違います、手入れすれば床も艶が出るので喜ばれます」

「建ててどのぐらいですか」

「三十五年、こうして天井までワックスを掛ける、塗る家などありませんからね」

未知子の注文に三木塗装屋はびっくりしたようだ。それも三十五年も賃貸している一七坪の借家である。

三木は、この家の塗装に四日間かけた。普通なら三日もやれば、済んでしまうのに、ドア一つでもきれいにワックスするやり方で、時間がかかった。借家はこんなに丁寧にやらないしやっただとしても経費も掛かって、支払ってもらえるかどうか心配になる。しかし、大家の大澤は、毎日進行状況に付き合っても何も言わない。この四日間の中で三木は、この借家が気に入って出来たらこんな家に入りたいと思うようになった。

「ここはもう決まっていますのですか」

三木は鼻筋の通った二重瞼の四十歳代の職人だ。塗装業は、父の後を継いだというから、腕も太く、腰の動きも敏捷で、年季が入っている。この借家が気に入っている様子で、なお親近感が湧いた。

「十二月末に出て行ったばかりですから、未だ不動産

屋にも頼んでいません、三月からと思っていますので。時々見に来る人がいますが、未だ、改装していませんかと断っています。

「すぐに決まりますでしょう。こんなに手入れする、天井にニスを塗る家初めてです」

「でも猫が、いましたから、汚れていたでしょう」

「猫は禁止していませんでしたのですか」

「確かに、契約違反だったのです。何度言っても私の留守中に家に入れてしまう、普通は外に出しているのですよ。特に野良猫を可愛いがって家の周りに集まってきたしまった」

「餌をやったのでしよう、それに決まっている」

「確かに、夕飯時になると猫が並ぶと言って、可愛いというのですから厳しく言いにくかったですね」

「ここまで荒らす猫を入れるなら、出て欲しいと言えばよかったです」

「こちらもいつも見張っている訳じゃないし、周りの人に迷惑だと言われて気づくぐらいでしたから」

三木と一緒に飲んでいた茶碗を置いて、未知子は六畳と四畳半の部屋の天井を見上げながら答えた。塗装してくれた三木になら、前の借家人の悪口が遠慮なく口からでてくる、彼も話好きだ。

「野良猫は家の中をどのぐらい荒らすか分からないでしょう、何度も注意したのですが、引越す時には五匹もいました。だから柱だけでなく、棚に飛び乗って天井まで爪を立てられました。あり得ないことなのですが、本当に爪の跡があったでしょう、登ったようです。出ていく方でも恐縮して、全額払いますから、と言って出ていきましたので、三木さんに頼んで、新品のように柱も天井もきれいにしました」

「そうですか、出てゆく人が、払ってくれるというなら遠慮なく、できます」

「野良猫を見ると、飼いたくなる人っているでしょう、そのタイプ。結局出てもらいましたが、そうかと言って塗装代はそんなにいただけませんでしょう、天井までは、汚していないと、きつと言い争いになります。でも、私は出て行ってもらった方が助かりますから、ほどほどに妥協します」

「犬は、どうですか」三木は、考えていることがあるのか、犬の話題に移った。話好きな塗装屋だ、珍しい。

「犬は、どうぞと言っています、今、犬を禁じたら、借家に入る人いません、どういう訳か入居者ほとんど犬を、高い部屋を求める人ほど犬を何匹も飼っています。現代病でしょうか」

「実は僕も犬を飼っている、飼い始めると辞められませんが、一匹から二匹と仲間が欲しくなる」

「そうですか、世話、億劫でないのですね。私は、風呂に入れるとか、散歩が嫌いです」

「でも、犬飼っている人に聞くと、犬の散歩は人間と一体になって、家来を連れて歩いているようで、こんなにいい気分になるときはありませんと。犬はなんでも言う事を聞きますから、子どもよりも始末がいいですよです」

「三木さん、お子さんいくつですか」

「女房もいませんよ、結婚したことはあるのですが、逃げられてしまいました」

「三木さんって、働きので堅そうに見えますけど」

「堅いのが、いいのかわいのか、きつと融通が利かない、これは親譲りで、変わりません」

三木は、お茶を飲んだ茶碗も水道で流して伏せた。手まめできれい好きだ。茶菓子に出した、大福も食べてくれた。

「昼ご飯はどうしますか」

「コンビニでちよつと食べてきますから、心配しないでください。午後、用事があるようでしたら、どうぞ、出かけてきてください」

借家と言つても結構細かなところがあつて、ドアの塗料、床のワックスの二度塗りとか、手入れするところが多かったので、未知子は、いつでも相談に乗れるよう家において、午前午後のお茶を出した。この四日間で話したことは身の回りのことが多く、塗装屋としての日常を知ることができた。

— その中で特に記憶したことは、彼が、通っているスナックに中学校の同窓生がママさんと働いている。彼女も離婚の経験者なのか、四歳の子どもを抱えている。子どもは保育園に入っているのですが、母親もついているし、手がかかるわけではないが、プロポーズをしても断られてしまう、という話。それでも彼は、諦めることができないでいる、この話を誰かに聞いてもらえたのだ。

三木は、四十代のはじめ働き盛り、話も好きだ、未知子は、彼に付き合いながら、彼の身の上話まで聞いてしまった。結婚に一度敗れている彼が、ここで結婚しようかどうか悩んでいるという事情まで、四日間のお茶の時間に掴んだ。

「なぜ、好きなの」と未知子は、お節介半分聞いた。「彼女とは同じ中学校の先輩後輩という関係を、駅前の『鈴奈』というスナックに行くまで知らなかった。

もう、二年通っているが、彼女には、特に彼がいる様子はない。遅番の時、僕が迎えに行つてあげると喜んで、『タクシー代助かります』と丁寧な礼を言う。『同じ方向だから、大丈夫、気にしなくていいよ』と言っている」

「……」

「彼女は、店の客として一線は守っているが、決して嫌らわれない、ある時は手を出して握手もする」
「そんな関係なら期待できるんじゃない」

未知子は本心そう思えるので、応援した。

「そうだよな、いつまでも独り暮らしは嫌だし、働いても酒屋につき込んでいようなものだから」

未知子の頭の中には、彼女、柳下千佳の様子が入ってしまった。働き者で話し好き、三木も話し好きだし、二人は似ているかもしれない。

三木は、相槌を打っているといくらでもしゃべりたそうだが、もうこのぐらいで終わりにしたいと思つた。「そうですね。もう三十五年大家をやっていますが空いたことありません。特にここは外からも見えませんが、家の脇に用水路が流れているので、外来者が入ってきませんので一軒の家と同じようです」

「外から見えない、借家はいいですね、大体はあけす

けで、通る人に見えてしまふものですよ。この家は、いつから不動産屋に頼むのですか」

「まだはつきり決めた訳ではありませんが、三月に入ったら頼むつもりです。決まるのではないでしょうか、いつ入ってもいいようにキレイにしておけば誰が来ても安心ですから」

三木は、まだ尻を上げようとしない、軒先に掛けてさつきからお茶を飲んでいる。借家に軒先があるのも珍しいので重宝している。この場所は、外の物をちよつと置くにも使いやすいし、外来者が来た時、腰を下ろし話しやすい。

「三月ですか。どのぐらい賃料を取るのか知りませんが、俺も入りたいな」と独り言のように声を落として言った。この言葉が言いたくて、さつきからぐずぐずしていたのだ。彼はすっかり気に入っているのか、独りごとにははつきりしたものの言い方だ。未知子は、サラリーマンと違って技能職を入れるときには気を付けなければいけないと考えていることがある。収入の問題だけでなく、日々の稼ぎで成り立っているのを実入りのいい時と悪い時があるし、コンスタントに収入ある人を入れたいと、普段から考えていることを改めて思った。

「うちは不動産屋に依頼していますので、個人交渉はしません」

「そうですか、それでも訊きますが、犬はいいのですね、自分は犬が大好きなもので」

「はい、今まで、室内犬は断ったことありません、しかし表だって言いませんが男の独り暮らしは、遠慮します、何しろ、片づけられない。家の内だけならいいのですが、外までもだらしなくなる。一目見て『男の一人暮らし』が分かってしまいます」

「私は、決して一軒家には独りでは入りませんよ。出来たら結婚して入りたいと、ここに来て思いました」

「結婚する予定ですか」

「いや、まだ返事はもらっていませんが、当てはあります」

不動産屋を通さずには決めたくない。何事でも思い付きで仕事をするのは禁止だ。特に家の賃貸契約は信用が大切。まして大澤の借家は、母屋の敷地に近く、人の出入りも見えるので付き合いも大切に人をと願っている。しかし、そのときによって外れることもあるから、入居者選びは大切にしなければならぬ。

「この家は、とつても住みよいせいか、いろんな人がここから巣立っていきました。そんな意味で次に入る

人には、この家を大切にする人をと願っています」

「年季が入っていますね、何代ぐらい入ったのでしょうか」

「七代ぐらいかな、忘れました」

かなり長話になった、未知子にすれば珍しいことで、こんなに借家のことを話題にするのは、三木の人柄か、それとも家に惚れこんでくれているかもしれない、と未知子は思った。

三木は丁寧な塗装と好きな女性の話をして、四日間の仕事を切り上げた。

(2)

三月入って、借家に見学者の申し込みがあった。

二か月間空いて、十分に風も通したし、猫の臭いも取れてきているので、四月一日からでも入れたいというあせりもあって、見学者を受け入れた。しかし、建物が古いという、言うなれば間取りが古風だということとで若い客層には人気がなかった。

三木塗装屋との会話を忘れたところに、借家の注文が入った。この借家を塗装してくれた三木は、結婚したので大澤の家が開いていたら入りたいと言ってきた。もちろん直接の受け付けはしない、不動産屋経由だ。

改装の時に結構心配してくれたので、三木なら頼れるのではないかと、電話に応じた。

ネコに荒らされた家を塗装した三木が、その時のことをよく覚えていて借家がまだ空いていれば、見学したいと頼ってきた。

「まだ、空いていますよ、M不動産屋と相談してください」と返事した。

彼を覚えていたのは、几帳面な仕事ぶりだけでなく、妻はいなくともいいが犬のいない生活は出来ないという、印象に残る話を聞いた。それだけでなく、離婚歴のある子連れの女性と結婚したいという話。借家の塗装を依頼しただけなのに、家の雰囲気が入ったのか、それとも未知子とのお茶が美味しかったのか、話は長く、かなり詳しくあったので彼女の頭に残っていた。

二か月半ぶりに会う彼は、仕事中に何度も聞いた彼女と結婚していた。

それも、子連れで、彼女は三十六歳という若さであった。

車で来た三木と彼女は似合いのカップルに見えた。彼女は細いズボンに長いブラウス、上着はピンクのショートコート。明るい雰囲気、三木と並んでいる。仲睦まじさが出て未知子は、受け入れられた。

数日後不動産屋からの連絡が入ったのは、三月下旬で、今のうちなら大丈夫よ、と返事をした。

借家の動きは三月と、九月初めが多いが、空いているなら、四月でもまだ、先の人優先、いい人なら入ってもらった方がいい。

翌日、不動産屋から、正式に電話が入った。

「四歳の子どもと夫婦、長年飼っている犬だけど、『フレンチ・ブルドッグ』という耳が垂れていて可愛いのですって」

木原相談員はてきぱきとして、話の運びがうまい。いかなれば、「困る」と言わせないほどの気迫がある。

「犬がいるから二か月分の権利金と保険補償組合に加えてもらったから」と、話す。入居者の是非は、不動産屋が持っていると言っても過言でない。

「借家の塗装をした人ですってね、結婚するので、アパートから、そちらに入りたいのですって。塗装の時にしっかり家を見たので、結婚した時は、大澤さんの家に住みたいと思ったそうです、かなり気に入っているようよ」

木原相談員は、家主をヨイショするのも上手い。

「うちに来た時は、独身だと言っていたけど」

「らしいわね、その時に、付き合っていた人。いい家

が見つかったから、結婚しよう、と言って一も二もなく口説いたようですよ」

木原の電話の声から、借家の塗装が持つ縁だという感じで入居の動機がしつかりしている。

「塗装に来ていた時、好きな女性には小さい子どもがいて、母親に頼みスナックに働いていると言っていた」未知子は、知っていることを話した。

「知っていたのね、まだ若いのよ、三十六歳」

「子どもは誰が面倒見ていたの」

「母親に面倒を見てもらっている。でも再婚するならば、子どもを連れていくと言っている」

「男の方は子どもがいてもいいというね。何しろ三六歳と男は四十二歳だもの、六歳違い。男が熟を上げるのは当たり前よ」

「男は働き盛りよ、いい仕事をする」

不動産屋は三木から直接聞いた話によると塗装の仕事は平らでない、収入あるときには稼げるが、ない時には三か月もない。ある時に使わず平均して使う。また、結構危ない仕事もするので、体の調子も整えておかねばならないので、ぜひ結婚したかったそうです。

三木塗装屋は、稼ぐときには三十万円以上稼ぐというから、賃料の七万円は高くない。

「妻も働いているのでしよう」

「当然よ。スナックですって。だから、家賃には問題はないでしょう」

「そうよね、でも子どもは夜どうするの」

「母親が、朝保育園に送り、夕方は、三木が迎えに行く、と話し合ったみたいよ、夕方から寝付くまで三木が世話するみたい」

話が長話になってしまった。話の途中、未知子の中では、気になることが膨れ上がっていた。それは四歳の男の子、隆介が義父と仲良くなれるかどうかだ。母親のいない中で義父の世話になるということは子どもにとつてはストレスであろう、まして三歳から四歳にかけて男の子は反抗期に入る。この借家で親子は落ち着くだろうか、心配だ。

「うちは構わないです、正式な夫婦であれば断る理由はないし、家の塗装もやってもらっているから、家を大切にしてくれるじゃないかな」

「じゃ、契約進めていいですね。保証は、保証協会で契約します」

と、いうことで、夫婦が引越してきたのは、五月の連休であった。この度、新しい人を迎えるのは四棟のうちの西南側。南には用水路とフェンスがあり、静

かな環境だ。

日当たりも良く、用水路の周りには数本の桜が植わっている。自動車の騒音は、気に病むほどではないが、その分交通には便利。その先に東名や東海道へのハイバスが通っている。

(3)

三木と千佳が結婚したのは二月末で、借家に入ってきたのは五月初めであった。未知子の庭にはドウダンツツジの白い花が賑わっている。垣根を越えてポタンが咲いていた。もちろん借家の周りも植えたツツジがピンクと赤い色を付けていた。この時期、未知子の仕事は多い、特にいつも庭をきれいにしておきたいという、大家としての気構えがあるから、庭や植え込みの下草むしりは手の込んだ仕事になる。何もかも一人でやりぬくという性格は長年入っている。

軽トラックが二台引越しの荷物を運んできた。部屋に収まるタンス、テーブルが五棹。目新しいものではない。子どもベッドと新しいダブルベッドがある。借家に落ち着けばもっと戸棚やテーブルが増えるのだろうか、今日の所は少ない。

今日の引越しと聞いていたので、その折には大家

に、何かと頼みたいこともあるだろう、外に出ていれば声を掛けやすいであろう。しかし未知子の方からは決して話しかけたり様子を見に行ったりしない。鍵は、不動産屋から渡されているので、そっちの問題はない、ことによると電気、ガス屋の注文があるかもしれない、都市ガスが通っていないので不便だ。トイレは公共用水になっている。

息子、隆介の部屋は南西の角にある四畳半。普通なら三木が占領しそうであったが、彼は、他に仕事置き場を持っているせいか、生活用品以外のものは、持ち込んでいない。この家は家族の生活の場として大切に使用してくれそうだ。

三部屋とリビングがあるから、三人暮らしでは十分だろう。ベランダの付いている子ども部屋の広さは四歳の子には広すぎる。犬と同居するというから神経使ったが、ひじ掛けのある部屋だから、犬が外に出やすいし、遊ぶには適している。部屋の外にはコンクリートの敷いたベランダあるので、洗濯の棹、自転車もおける。

引越しは、一日かかった。三日間で三木夫婦は引越しと整理が終わった家に家族三人が入居してきた。

三木は塗装業の仕事材料、道具梯子類のものは、少し

離れたところに、いままで通り、軽トラと一緒に置いてきたから、家族の送迎は自家用車一台で済む。隆介の保育園の朝は、園のバスが迎えに来る。夕方は、遅くまで預けておきたいので、三木が乗用車で迎えに行く。

数日たったある朝、未知子が庭を通りがかった時に、隆介のはっきりした声が届いた。

「おじさん、行つてらっしゃい」と大声で叫んでいる。義父おじょうさんの名前を言わないで見送っている、三木は、「おー」と言つて、仕事の車で出かけて行つた。

隆介は、園の迎えが来るまで、自宅にいます。保育園の送迎車は未知子の家の門口に停まるから便利だ。

千佳は、まだ寝巻のまま、隆介を送りに出てくる。千佳が帰ってくる時間は、夜の十二時ごろだと聞いている。

彼女はこれから、朝の準備をして、昼頃出かける、スナックで、夕方五時の開店に向かって準備をするという。こんな生活を実家の母親を頼りにして良くやってきたと思う。結構、夜働く生活は身に付いている、そして収入もあるから辞められないという。

三木は、結婚して初めて分かったことだが、やはり塗装業でも一本立ちになるには、家庭を持っているこ

とが大切で信用に繋がるということを知った。

昨年の暮れ、三木が柳下千佳を、車で送った時の言葉を、彼女は思い出していった。

「独り者だから」と、信用されることが多く肩身が狭かったという。

「仕事の性質上、家の内に入るし、また、長い付き合いになるから、四十歳過ぎて独り者というところ、信用されない」

「どうして」と、千佳は真面目に聴いた。

「そうだね、変り者、という感じかな、それともなんか病気を持つているかも、例えば精神異常者、そうだと今流行りの社交性のない人と見られる事も多い」

「そんな、独身だというだけで、変な目で見られることあるのですか」

「多いよ、一人前に扱われない、決してどこもおかしくないのだが、あえていうなら面倒くさいことが嫌いな性質だろうな、と思われている」

「けっこう、偏見があるんですね。男にはないかと思っていた」

「女性は、その点いい、男に声かけられるのを待てばいいの、だから」

彼は、本気で千佳を口説いた。

「そんなことはありませんよ、デパートのレストランで働いていた時、相手が未婚だというので、その言葉を真に受けて、ある人と付きあっちゃった、そこで子どもができたと言ったところ、僕の子じゃないという、情けないったらなかった」

「……」

「それで、なんか裁判で、争う人がいるらしいけど、そんなこととして生まれる子を傷つけちゃいけないとさっぱり慰謝料を貰って別れました。自分で育てるぐらい、稼ぐわと啖呵を切った」

三木は、スナックと言う中年好みの店でまじめに働く千佳を見て、きつと彼女の過去にも人に言えないことがあるのだろうと思っていた。その通り、シングルマザーであつたのだ。その話をきちんと聴くことが出来て良かった。子どもを産んだ彼女を尊敬させよう。

その上、料理の腕を生かして、スナックを開いたというその強さに惹かれる。スナックは五時から開くので、日中は子どもを育てられる、いい環境であると考えた。

「それで、店を持ったのですか」

「そう、もう男に対して興味を持たないと決めて、生きて来ました」

千佳に、ビールを勧めるが、彼女は決して飲まない、収入のためにも、飲んだ方がいいのだが、飲まないとい決めてスナックをやっている。

「僕が口説いたから、その仁義を解いちゃったのかな、悪かったかな」

「隆介を可愛がってくれるといので、安心したのが、はじめの一步です」

「隆介君、本当に可愛いよ、大事にするから、安心して」

「どうして、私と結婚する気になったの、ですか」

「そうだな、もう一ついい借家を見つけた、そこは俺が塗装した家なんだ。そこで住みたいと思った」

「え、ロマンチックなこと。どうしてなの」

「行ってみればわかるよ、とつてもいい家だ。住みやすい。そればかりではないが、ペンキがいい、柳下さんにも見せたい」

千佳は、おかしくて笑ってしまった。自分が塗装したことを自慢する職人初めて見た。大体大工職は自慢するが塗装の腕を自慢する人はいない、よほど自信があるのだろう。

「床も天井もいい香りがする。今は新建材を使ってしまっただろう、その点昔のまま残っているのだ、塗装屋

でなければ分らないけど」

こんな口説き文句に乗せられて千佳は三木と結婚した。でも一番気に入っているのは、彼が隆介を可愛いがってくれる、特に犬好きで、ぜひ隆介と一緒に飼いたいという子ども心に惹かれた。

(4)

この日、未知子は、五月の連休を当て込んで家の前の花壇の整理をはじめた。

花壇には、折々の季節の草花を植える。日日草、マリーゴールド、ゼラニウム、サルビアに植え替えていると、千佳と隆介が寄ってきた。

未知子の方から、「お花好き」と声を掛けると、隆介は、「わからない」と言って、母の背中に隠れた。

「おばさんは大好きで、庭一杯植えて花見をする」

隆介は、返事をしない。

「トンボだ」彼が叫んだ。カワトンボが柔らかい羽を振って池の上を飛んでいる。

「トンボならいつもいるよ、今にオニヤンマが飛んでくる」

「僕、トンボに触ったことないから、今度おばさん捕まえてね」

「大丈夫よ、ここにいれば、おばさん、見つけたら呼ぶね」

千佳は洗濯物取り込みに、先に家に戻った。エプロンかけた姿は若々しい。まだまだ夜の仕事が出来そうだ。それでいて子どもの父親でない人と結婚することの不安感が、未知子の胸によぎった。隆介はおとなしうだが、男の子の反抗期はそんなに簡単ではないだろう、まして四歳なら、かなり反抗する。反抗期には、どんな親でも手を焼く、まして、新しい父親では、その上、保育園も借家の近くに変えたから、隆介の扱いは難しい。新しい環境に馴染むだけでなく、借家の生活も大変ではなからうか。

未知子は、母屋の前にある池に隆介を誘った。

「鯉がいるでしょう、大きな鯉はお父さんとお母さん。最近子どもを産んだの、石の陰にいるでしょう」

「鯉の子ども、僕初めて見るよ、なんという名前」

「えーと名前は付けていなかった、隆介君、三匹もいるんだけど名前考えてくれる」

門の外から、千佳の声がする。

「隆くん、お母さんが呼んでいるよ。買い物に行こうって」

「でも、僕行きたくないな、もっと鯉を見ていたい」

「魚が好きな、ね」池の端に置いた石に乗って水の中をのぞき込んでいる隆介のあどけない襟足を眺めていると、いとおしきを感じる。未知子も長男を育てるときには隆介のように池の傍において草むしりをした。「おうちに帰りなさい、またおいで」

「うん、でもぼく、おとうさんとは買い物に行かない、お母さんならばいいけど」

と、意味のある言葉を残して隆介は、走っていった。

六月になったが、晴天が続く。

隆介が保育園から帰ってきた。

三木は隆介を置いてすぐ軽トラで出て行った。父親がいなくなったせいとか、未知子を見つけ庭に遊びにきた。

「鯉を見せて、大きな鯉」

鯉は、魚だということが分かるのか、池の傍に寄ってきた。隆介の大きな頭に毛が伸びておかつぱ。靴を揃えて、池の縁に膝を折った。

「これが鯉、魚じゃないみたい」

「そうね、魚のように隠れないものね」

「この赤い方がお母さん、黒いこっちはお父さん、小さいのは、子ども三匹」

隆介は興味を持ったのか、池をのぞき込み、一生懸命だ。

「小さくて赤いのはお姉さん、黒いのはお兄さん」

「そう、隆介君、お姉さんいる」

「いないよ、お母さんだけ」

隆介は言葉がはつきりして、話すことに慣れている。保育園で教わっているのだろう。

「あれ、お父さんいたでしょう、背の高い人」

「エ、あの人はよその人だよ、だって毎晩お酒飲むから嫌いだ」

「お酒飲むの、どうしてかな」

「知らない、でも、男の人がいないと家が借りられないから、とお母さんが言っていた」

母親の言っていることをよく聞いているだけでなく、周りのことをよく見ている。

「そうか、お母さんの言うとおりだね」

「僕、おばあちゃんのところがいい、こっちは家は嫌いだ、僕一人で眠らなければいけないんだもの」

「一人はイヤ？」未知子は、余計なことを訊いてしまった、と首を縮めた。

「いやだよ、だって夜中におしっこに行きたくても、誰もいないんだもの」

「そんなときどうするの」

「一人で行く、でも怖い」

「お母さんを起こせばいいのよ、弱虫」

「だって、あの人が怖い顔をする。僕、あのおじさん嫌いだよ、時々犬に追いかけてさせるんだ」

尋ねもしなかったが、三木のことをさらさらとしゃべる。

「隆介君は、お母さんと一緒に寝たいのか、でももう学校へ行くんでしょう」

「まだだよ、保育園だよ、保育園は、病院についているから、病気の時、役に立つんだって」

「あ、知っている。おばさんもその病院で、膝の痛いのを直してもらっている」

「おばさん、膝痛いの」

隆介は、屈託なく、未知子が聞くことに応える。半ズボンの膝を見ていると、未知子の長男を思い出す。

彼は半ズボンが好きで、真冬でもその格好で遊びに行つた。今は、結婚して府中市でサラリーマンしている、仕事で忙しいと言つてなかなか帰つてこない。

「うん、階段降りるときね」

「僕のお祖母ちゃんも膝痛いと言つた。湿布貼るのを手伝つた」

千佳が、隆介の手を取った。手が冷たい、洋服が二枚では、風が涼しい分寒く感じる。

「年取ると、みんな痛いというものね」

「隆介君、おばさんと仲良ししようね。指切り」とすっかり隆介と仲良しになった。池の鯉で隆介を釣りあげたみたいだ。

彼は、小さな小指を出した。全体的小ぶりだ。今まで、祖母と過ごしたせいか、未知子に警戒心を持たない。落ち着いてしゃべる。

帰りかけた隆介が、ちよつと返って戻ってきて、未知子に内緒話をするように、小さな声でしゃべる。

「僕、お母さんに内緒だけどあのおじさん嫌いな」

「どうして」

「すぐに怒る。僕が、犬嫌うからいけないんだって、お母さんが言う」

「犬嫌いだったら自分の部屋に入れないように戸を締めたら」

「でも、そんなことするとおじさんに怒られる」

未知子は隆介を抱き上げたくなった。新しい父親になじめずドギマギしている、今まで父親の存在を知らないで育っているから当然だ。

「もし、おじさんが怒ったら、おばさんのところに逃

げておいで、おばさんはいつでも玄関開けておくからね」

この言い方は隆介の祖母の言葉であるう、未知子は、祖母に無意識になり替わってしまった。誘った後、この閃いた言葉は何だろうと、反省した。

確かに四歳にしては腕も足も細い、普通なら走り回る歳なのに、動きが遅い。

三木がいる時間は、ほとんど、自分の部屋で一人遊びをしているようだ。そんなとき、犬、ブルドッグが隆介の遊び相手になっているのだろうか、そうとは思えない。まして隆介は犬を怖がっている。

こんな夕方、三木は保育園から連れ帰った隆介を放っておいて、相撲を見ながら酒を飲んでいるのかもしれない。四歳、遊び盛りの隆介の面倒を見るのは、慣れた人でなければできないだろう。

(5)

そんな懸念を持った後、三木の家からこどもの泣き声がするという、近所の主婦から情報が入っていたが、風向きの関係からか、未知子には聞こえなかった。しかし、未知子は、気持ちの中では犬とかかわりて何らかの体罰を隆介は受けているのではないかという怖

れをもっていた。

「子どもの泣き声が普通でないと感じたら、警察に届けた方がいいですよ、私は、もう少し様子を見ますが」と言つて、話しかけてくれた人の忠告には乗らなかつた。

ほぼ毎日、雄介の様子を見ているが、変わった様子はない。

「おばちゃん、お早う」とも言つて千佳に見送られて保育園の送迎車に乗る。夕方は、父親と一緒に車で帰つてくる。その時間は、十八時から、十九時になることもある。未知子が外に立っていると、傍に来て「鯉を見せて」と、せがむのも以前と変わらない。

「鯉がね、隆介君を待っているよ。ずーと入り口の方を向いて、隆介君がいつ餌をくれるのかとみていたよ」と未知子は隆介を励ます。

「本当、僕今日は餌がないよ、どうしよう」

「大丈夫、子どもの餌、買っておいだから、小さい粒よ」

小さい粒の餌を隆介の手のひらに落としした。

「このままばらまく、おいでー」と声を掛ける。

子どもの鯉が三匹、足元に寄つてきた。

「ヨシ、これを食べて大きくなるんだよ」と、隆介が

真似する。

「来た来た、食べて大きくなるのだよ」と大きな声で叫ぶ。

その言葉は隆介に言いたい、彼の方こそ、「犬に負けちゃだめだよ」という励ましの言葉が未知子の気持ちの中にあつたが素直に出て来ない。

「ウン、僕、ポコすきだよ、一緒に寝ているんだ」
「抱いて寝る、怖くない」

「どうして」

「ならいいけど、鯉は大人しいけど、犬は怖いからね」
「なぜ」隆介は、なぜと訊き返してきた。隆介は前に、犬が怖いと言つたのでつい言つてしまった。

「おばさん、僕の家ポコは怖くないよ」

「そう、そんならいいけど、気を付けな」

「なんで、ポコは怖い」と気にしている。

「いったん車を置きに行つた三木が戻つてきた。

「寒いから家に入ろう」と大きな声で叫ぶ。

「隆介君、お父さんとご飯でしょう、また明日」未知子は促した。

「鯉くん、また明日、元気にしているんだよ」

隆介が帰つてゆくと、子どもの帰る時間を知らせる「カラスの赤ちゃん」の歌が、カラスナゼナクノー、

カラスハヤマニと空に流れた。

未知子は、「隆介君ぐらゐの孫がいればいいな」とセンチメンタルな気分浸っていた。長男は四十歳になるがまだ子どもがいけない。孫がいけないと、祖父母は元氣が出ないと人がいうが本当だ。他人の子でも欲しくなる。一緒に話しただけで、隆介は可愛い。未知子は彼を待つようになった。なんといても子どもの好奇心旺盛な眼がいい、真剣に眺めているときなど天使のように思えてくる。

隆介の帰りを待つようになった。毎日でもおしゃべりしたくなるから不思議だ。

保育園が休みの日、未知子の姿を見て隆介が寄ってきた。

「僕、あの犬嫌いだよ、だって僕を吠えるんだもの、池の鯉なら怖くない」

「犬はね、嫌いだと思うと益々嫌いになる、お父さんには馴染んでいるでしょう」

「うん、おじさんは嫌いでないが、でも怒ると怖い。だって、僕の分まで、ごはん食べてしまう」

「それは、困るわね、なぜ食べてしまうのだろうね」
「お母さんが作っていったものは、美味しい、と言っ

ている」

隆介は、四歳の子とは思えないほど、観察が行き届いている。

「隆介君は、そのことお母さん言わないの、言ってたくさん作って貰ったら、おかあさん料理旨いのでしょうか」

「うん、おいしい。料理が好きで、お店辞められないのだから」

「いいお母さんね。料理旨い人は心もやさしいのですってよ」

「お母さん、やさしいよ」

隆介は鯉を覗きながら母親を自慢する。

「お母さんと一緒にいたいのでしょう、そうすれば、犬に隆介君の食べ物食べられなくても済むよね」

彼は、未知子の言葉が聞こえたのかどうか返事をしない。四歳では当然だ。

「ここの鯉どうしてこんなにお腹が大きいのか、何食べているんだろう」

「ほんとう、お腹が大きいのは、赤ちゃん産むからかもね」

隆介は、嬉しそうに未知子を見上げた。すっかり、未知子を信用して何でも話す。隆介はここに来る前は

祖母に育てられたというから、年寄りの女性に親しみを持つのだろう。怖気づに何でも話をしようとしている。未知子は未知子で、孫はいないので、ちよつとした話、隆介の悩みを聞くことが楽しみになった。

「エ、本当、赤ちゃん産んでほしいな、そしたら僕の家にもくれるよね」

「小さい方の鯉は、去年産まれた」

「鯉の赤ちゃん早くみたいな、僕見たことない」

「今度生まれたらあげるね」

「ほんとう指切りゲンマンだよ」

「良かった。赤ちゃん生まれたら、必ず、隆介君にあげるからね」

「うれしいな」

じゃ、またねと言って隆介は帰っていった。前髪が伸びておかつぱ、坊ちゃんスタイルだ。きつとまた遊びに来るであろう、祖母との関係は良かったのだ。しかしその関係を切って結婚し、隆介を近場の保育園に入れた千佳の勇氣。祖母との別れ、これら一連の変化は隆介にとっては大きな犠牲であつたらう。

十月が終わろうとしているある朝、未知子は、隆介の母親、千佳に挨拶と一緒に声を掛けた。

未知子は、道路から入る敷地の砂利を竹箒で履いていた。車の出入りが多いので、水路になっている窪みに砂利がたまる、通行人のたばこの吸い殻まで落ちてくる。

「いつもすみません、掃除まめにしていますね」

「案外、側溝にごみが溜まるものなのです。道行く人の足元が悪い。また雨が降るとゴミがたまって水が流れず、びしゃびしゃします」

千佳は買い物袋用の大きなビニール袋を持っている。これから出勤するのであるう、カラフルな防水コートで若々しい。

「鯉を見に来るように言って下さい。彼けっこう喜ぶのです」

「ありがとうございます。隆介はいつも一人ですから、大家さんに声を掛けていただけると喜びます」

食料品をたくさん買い込んだ千佳は、明るい笑顔で、いかにも料理好きという感じがする。動きも敏捷で、世間話をしている暇などなさそうに、早々と会釈して帰っていった。彼女はこれで夕飯の支度をして、四時には家を出るのだ。夫と代わり番こに生活するのもし

いかもしれない。将来は、一軒家を買うつもりで、そのためにも借家で貯金しているのだと聞いている。借金して先に家を買うよりもお金を貯めてから買う方がいいようだ。

ここに入ってきたときの、大家さんなどという高を括った不愛想さが取れて、最近はず佳の方から挨拶する。きつと借家の生活に馴染み、そこでの結婚生活がうまくいっているのだろう、家を気に入っていただけることは何より、大家冥利である。スナックで働く、ママという玄人っぽいイメージを捨てて、家を切りもりする穏やかさが表情にでてきている。

未知子は、ホッとして見送った。入居者が穩便に過ぎしてくれる、そして長く入居してくれることが未知子はうれしい。この喜びで生きている。

貸家を持っている人たちが集まると、彼らはできるだけ短期の入居を好む傾向がある。それは、更新時の礼金を取れるからである。未知子は、以前から、更新時の礼金を取っていない。新しい人が入ってくる時には、家の内装・外装を丹念に手入れするのは大家の務めだと思っている、だからできるだけ長く入っていて欲しいと願っている。その気持ちに応えるのか、どの入居者もはつきりした理由がなければ出て行かない。

転勤とか、家を購入したとかいう理由が多い。先ごろは、外国にいる子どもから、あちらに移住して欲しいと呼ばれて退去した人がいた。未知子は過分なお祝いを上げて見送った。

だからどの人も長く入居してくれるので大変うれしい。それだけでなく、退去しても、知人として声を掛けてくれる。未知子の方でも家を使ってくれたという感謝、親近感が芽生えていることに気づくのである。

しかし、なぜか未知子は、隆介の生活が気になる。母親が遅く帰る、父親が隆介を保育園に迎えに行く。

家に帰れば父親と一緒に夕飯を食べるといふ生活は、隆介にとってつらいのではないか。これなら祖母と一緒にの方が良かったのではないかと、外から見て思えてくる。なんかぎこちなく、千佳の身勝手さを感じる。

隆介が簡単に義父になじむとは思えない、母親と一緒にいる時間が少ないと思えてしまうのだ。

未知子側からはよく見えない、わざと父親と子どもの接点を多くして、親子関係を親密にしているのかもしれない。しかし、隆介から見たら、なじまない父親にすべての世話になるというのは、どうだろうか。

未知子は、ある日、鯉を見ている隆介に、父親と食事をするとき、どんなと聞いたことがある。

「お父さんと一緒にご飯食べるでしょう、楽しい」
「ぜんぜん。だっておじさん、相撲ばかり見ている、野球も見る。僕は、相撲は分からないから、本当は『ドラえもん』や『のび太』を見たいよ、でもそれはダメだと怒られる」

「そうだよ。マンガだよ。お母さんに頼んだら」
「お母さん、忙しいから駄目だと言うよ」

(7)

隆介は、ある晩、母たちの部屋に入っていた。

「一緒に寝ると約束したのに」と怒った。

借家に入ってから隆介は四畳半の部屋で一人寝ることを強いられた。その代償としてポコを抱いて寝てもいいという、一人で寝ることが当然になってしまった。

冷暖房の効く部屋で母親と一緒に寝ることを夢見ていた隆介の期待は裏切られ、夜中に帰る千佳は当然のように三木の傍で寝ている。

「どうして、お母さん、僕の部屋で寝ないのだ」

隆介は、怒って、部屋の入口に立っている。

「だって、そろそろ小学校でしょう。小学校に入る子は、お母さんと一緒に寝るのはおかしいよ」と、千佳は諭した。

「でも、でも、友達みんなお母さんと寝ているよ。犬と一緒に寝たくない、僕は毎晩お母さんを待っている」
泣きながら隆介はかなり強く主張をした。

「お母さんは僕のものだ、小さい時から、ずっとそうしていたんだ」

隆介は、何としても僕のお母さんだと言い続けて譲らない、ベッドの傍で地団駄踏んでいる。

隆介は独りで寝入るのが嫌だ、とはつきり主張した。
三木は三木で、毎晩でも千佳と一緒に寝たいと思っている。

「お前が、せっかく帰って来ても、隆介の部屋に入ってしまうのは、つらいよ、僕の布団の中でゆっくり寝て欲しい」

千佳を、夫と隆介が、取りっこをしている、切ない話だ。

「子どもだから、寝付けば分かりやしないさ」と、言っ
て三木は譲歩しない。

「そうでもない、いつも、待っているのよ、同じ布団に入ると抱き付いてくる」

「なんだよ、それ俺と同じじゃないか。したい時に来るから結婚だと思っていたのに、それができないというのは嫌だね。でも、譲歩しよう、隆介が眠るまで

で、後は必ず俺のところに来てほしい」

夫婦でありながら隆介がいることで、面倒なことがおきた。

「まあね」

千佳はうやむやな返事をした。本心は、結婚はしたが、性には懂れていなかった。隆介と一緒に棲める、棲ませてくれる、好条件の男性が現れたから、そこへスポット入り込もうと思っただけで、そのほかの欲はなかった。特に性へのあこがれはもつとなく、次の子どもを絶対に持たないと決めて生きてきている、だから三木がどんなに子ども欲しがっても産まない、もう、若い時のように失敗しないと決めて避妊薬を飲んでいく。

だから、隆介以外の子どもは欲しくない、父親違いの子どもを育てる自信はない。彼を一人前の男として育てたい、そのための手段として三木のプロポーズを受けた。ここで三木の巢に入れてもらって、隆介を一人前に育てる、この生活が一番いい方法だと決めている。

(8)

正月過ぎたころ、隆介が、何かにおびえるような目

つきをするようになった。それに気づいたのは未知子である。

風が冷たくなつて池の鯉も動きが悪い。大きな体を並べ水の中に浮いている、空に揚がった鯉のぼりのようだ。

覗き込んでいた隆介が、「おばさん、鯉さんどこか痛いかな、動かないよ」と言った。

「水が冷たいから、動かないのよ」

「だって、元気だった子どもの方も動かないよ、おかしいよ」

未知子はさて困った質問だと、隆介をよく見ると彼の腕に、つねられたような痣がある。

「これどうしたの、どこの角にぶつけた」

「ううん、なんか出来ちゃったの。転んだ覚えはないんだけど」

「おかしいね、お母さんによく見てもらってよ」

「ポコが散歩できないと僕に当たるんだ」

「誰が散歩をしているの」

「お父さん、今仕事が多くて、僕を置いて仕事場に行つてしまう、ポコを置いていくから、すぐに帰って来ると言つて出ていく、でも帰つてこない」

「……」

「ひとりには怖いよ、暗くなると、ポコも機嫌が悪い」
未知子は独りで留守番する隆介が心配になった。

入居してきてから、しばらく静かだった三木家の方角から、犬の声が大きく聞こえるようになった。ブルドッグは、それほど鳴かない犬だと聞いていたが、夕方、子どもの声と一緒に泣き叫ぶような激しい声がする、犬だけなら心配はないが吠える声に混じった子どもの声が特徴的だ。この声に気付いているのは未知子だけでなく、三木家の後ろになる、川向こうの老夫婦まで聞こえるらしく、

「一晩おきだよ」という。

「エ、そんなに」と驚かされた。

重ねて、それはどんな声でしょうか、と訊き返した。

「犬を叱る声ではありませんが、やはり子どもがおびえたときに出す、『あっちへ行け』という悲鳴に近いです」
「なんでそんな声を、だって隆介君と犬は仲良しだと思っていた。急に散歩に行かせようとしているのかも知りません」

「怖いですよ、ここの奥さん、スナックで働いているのでしよう、隆介と三木さんは義理の関係でしよう、それが心配です。外から様子を見るようにしています

のよ」

「最近、隆介君の姿が見えませぬね、風邪でもひいているのかと心配していました」

「そういえば、まさか縛られているというわけでもないでしょう」

老夫婦は怖いことをいう、話していることが現実になつてしまうような、恐怖を感じる。

日中、庭の草むしりをしていた、特に道路際の生垣根の下は三日に一回はむしらなければこの時期、草が大きくなって取りにくくなる。最後は、ゴミ取りを持って、草を集めていると、そこへ自転車で帰ってきた千佳に会った。

「お買物、よくやりますね」

「夕方には出てしまうので、夕飯を作っておきます。

ついでに明日の弁当まで、一緒に作っちゃいます」

「ご主人も弁当を」

「そうです、職人ですから、どんな場所で働くかわかりませぬので」

「いい奥さんを貰ったと三木さん喜んでいてでしょう」

「でも、私が夜、遅いので気に入らないようです。好

きでやっているんだろうと嫌味を言われます」

「なんとということ、三木さんも飲みに行けばいいでしょうに」

「それがね、他人の時は毎日通ってきてもいいが、結婚すると店の出入りはご法度なんです、やはり夫から見れば他の男に色気出していると、とられがちなのです。商売でカウンター越しなのに、夫は見たくないでしょうし、客の方も夫が座っていると知れば、敬遠しますし、冗談も言えなくなります。それが噂になれば、客はどんどん減ってゆきますから、商売になりません。やだ、私長話してしまつて、仕事の邪魔をしました」

「いいえ、そんなことありませんよ、隆介君、この頃鯉を見に来ないので心配しています、と言ってください、いやだ、四歳じゃわかりませんよね」

「大丈夫です、鯉が可愛いと言つてましたから」

「隆介君一人で家にいることあるんですか」

「ちよつとだけ夫が出掛けるときありますので。夕飯は用意しておきますし、犬と一緒にいますから用心棒になります」

「本当に。来年は小学校ですか」

「いいえ、再来年です」ではと言つて千佳は家に戻つた。未知子は彼女と話す機会ができて良かった、と思

つた。隆介の叫ぶ声を周りの人が聞いているという噂を聞いたたびに心配になる。せつかく貸家に惚れこんで入居してくれたというのに、なんか不祥事件でも起きてしまつたら困る、と気になった。

未知子は、三木夫婦が借家に入ると決まつた時、千佳のやっている「鈴奈」に寄つた時のことを思い出す。彼女のスナックを見ておきたい、見ておけばこれからの参考になると思つて、身元を明かさずに男性の友人と一緒に入つた。

L字型のカウンターには、客が十人ほど座れる、その後ろのテーブルには五卓ほど並んでいて、複数で来た客は座れる、それだけの空間だが、カウンターはいつも一杯だという。駅の近いところに深夜まで飲める店がない、という立地条件が味方をしている。ここへ三木は二年も通つて、借家を手土産にして、千佳を射止めた。そのぐらい彼女の手下料も旨かつたともいえる。

千佳の一日は夕方まで客に出すおつまみの準備をする。夕方五時の開店で客が来る。使用人は、中年の女性一人、料理上手な人だと褒めている。女性二人で客を迎え、その扱いは慣れているだけに問題もなく、い

い商売をしていると感じた。千佳は根っから料理が上手く、カウンターの中での商売むきである。家に閉じ込められる人ではない、ということが分かった。

(9)

借家に、入居して半年経った十一月ごろから、三木は、母親べつたりの隆介の世話や、夜の夫婦の営みからも彼が邪魔になってきた。彼のいない生活をしたい、と思うことが多くなった。そのためには、隆介を亡き者にするしかない、自然にいなくなる方法を考え始めていた。

隆介の弱みは何だろう、ブルドッグのポコである。ポコを道連れにされるのは困るが、なんかポコを取り入れて、工夫する方法があるのではなからうかと考えていると、新聞記事が目についた。

三面記事の欄に、「子どもが食べているパンに、犬が飛びつき子どもはひっくり返って後頭部を怪我した」という内容である。

これが記事になるというのは、その場所が公園で犬の放し飼いを禁じているからである。もちろん犬が放し飼いでなければ、この事故は起きなかつたらう。飼い主は狂犬病予防法で罰則を受けると書いた記事を、

三木は読んだ。

絶対に罰せられないで済む方法はないか、自宅なら犬の放し飼いは自由だ。その犬とのトラブルで、隆介が怪我、いや亡くなる、この方法がよさそうだ。隆介はポコと一緒に寝ている。その寝ている姿をみると、ポコは隆介の肩の辺に、首だけ出して眠っている。この形を利用するのだ。絶対に分らない方法で、隆介の頭に怪我、または悪くいつて死んでしまうかもしれない、簡単な方法はないかと三木は仕事でも、そして家に帰った時も考えていた。もちろんそれは、妻の眼が届かぬ夜中である。夜中というと隆介が眠っている時、ポコを使うことだ。ポコに、隆介を噛みつかせる方法はどうかだろうか、ポコは、五歳で成熟している、ポコの犬歯はかなり伸びているので犬歯を利用する。前々から咬む癖があることを三木は知っていた。咬み癖はブルドッグ特有のものである。が、だからと言って今までは隆介にも、周りの猫、鳥にも影響はなかった。しかし犬に噛み切られた人の災害、酷い怪我した人を見たことがある。その事件も飼い主の食べ物を欲しがったという例である、なら隆介になんか食べ物を持たせる方法があるのではないかと考えた。

ある晩、隆介の好きなソーセージパンを、犬が欲し

がり取られたことがある。

隆介に、ソーセージパンを食べさせながら寝かせてみた。四歳の彼は半分も食べないで寝付いてしまった。そのパンを、犬が齧っている。この方法で、丸いソーセージを手に持たせて眠らせた。傍にいたポコがそれをなめている。このやり方でポコの好きな鶏肉の入ったソーセージを隆介の首の根元に落としておく。一緒に寝ていたポコは当然ソーセージの残りを食べる。そのソーセージがおいしかったのか、味を占めてポコは、隆介の傍を離れない。

次の晩はもつと鶏肉の入ったソーセージを切らずに焼いて隆介に持たせた。隆介が眠り始めた後、そのソーセージは隆介の首の根元に落ちていた。それをポコが食べ、臭いが付いている隆介の首までなめている。三木は、この方法を使うことを思いついた。鶏肉の入ったソーセージを隆介に食べさせ、余分なものは彼が寝ている首の根元においてみた。ポコはそのソーセージもしつかり食べた。鋭い歯で食いついたので、首の頸動脈迄歯が通り、多量に出血した。

(10)

千佳と庭先で立ち話をした次の週の朝、三木家に救

急車が入った。

千佳が呼んだらしい。未知子は慌てて借家の傍まで行って救急隊の様子を見ていた。

隆介が運び込まれていく。

「どうしたのですか」と誰でも聞く言葉を救急隊に声を掛けた。

「こどもが」

「エ、隆介君が」どうしたのだろう、どこかで転んだのか柱に頭をぶつけたのかと、未知子の頭は真っ白になった。

「犬に噛まれたのですって」という声が聞こえた。

未知子は、「エ」と思った。そんなことあるわけがない、ポコは、気は荒いが隆介には慣れている。いつも一緒に寝ていると聞いていたのに、なぜ、昨晚に限って噛みついたのだろうか、噛みつくような悪さをしたのだろうか。

「犬と喧嘩でもしたみたい、なんか部屋が真っ赤になつていたとか。きつと犬、ブルドッグのせいじゃないかな、一緒に寝ていたというから」

「でも、きつと噛みつかれたのだ。そうだ、一緒にご飯を食べているというか食べ物の取りっこをしたのだ。美味しいものを食べたのだろう」

「……」

「だから、犬などと一緒に寝るのは良くないと、お母さんに言ったのに、どうしたのだろう」

一通り話していた近くの人たちは散っていった、未知子だけが心配で残った。

未知子は、隆介の命だけはとりとめて欲しいと願っていた。出血の状況を見たわけでは無いから、何とも言えないが、かなりひどいかもれない。千佳がいる時間で良かった。

三木が隆介を可愛がっている姿をあまり見かけなかった。もちろん迎えは彼の仕事であって、彼は隆介と帰ってくると、一時間後には出かけてしまう、そして十九時ごろ帰って来ていた。だから、家に帰って来ていた隆介は、一時一人であった。まず、こんな平地の一軒家だから、危ないということはないが、犬に任せて一人にしておくのも危険だろう。

サイレンを大きく鳴らしながら救急車が、去っていった。後には三木もいない、一緒に行ったに違いない。

こんな時、ふと千佳の存在が気になる。確かに夜の十二時ごろに帰ってくると言っても、夜中は隆介を見守るとか一緒に寝ていればポコの嘔みつきは起こらなかっただろう。

(11)

隆介の状態は、夕方には分かるだろうと、重い気持ちで未知子は家に戻った。

午後、千佳が、ふらふらと当てのない顔で未知子の家に入ってきた。

下を向いたまま、心ここにあらずという感じで立っている。

「どうなさいました」と声を掛けると、「隆介が、りゅうすけが」と言いながら泣いている。

「座ってください、そこでは何ですから」と、上り框に座ってもらった。

「いつも、お世話になっていたようで、ありがとうございます」

「そんなことどつちでもいいことです。鯉を可愛がってくれますので、私も楽しかったです」

「鯉の話はよく聞きました、子どもを産んでもらうんだと言っていました」

「それよりも隆介君の様子ですが」

「出血が多くて、危険な状態です」

「エ、本当ですか。病院の手当てが遅れたとか」

「確かに、小児科のある大学病院まで運びました。そ

れに時間を取られました。これが、今回の失敗でした」

「どこを、やられたのですか」

「首です、頸動脈を犬にかまれていた」

「なぜ」と性急に尋ねる。なぜと言っても、答えは出ないだろう。

「それがめずらしいことに、隆介が鶏肉の入ったソーセージを齧って寝ていたらしく、そのソーセージは犬の好物で、ポコはソーセージと一緒に隆介の首まで齧ったらしいのです。ポコの方も寝ぼけていた、というのですかね」

「そんなことあるのですか。あんなに元気な隆介君がなぜ、ソーセージを食べながら寝つくなんか信じられません」

「そうなのです。私もそう思いました。あり得ないことだと、警察署に回されました」

え、警察ですか、何を疑っているのだろうか、未知子には理解できない。

「私たちにも分からないのです、きっと隆介が、寝しなにポコに上げて、寝てしまった。ソーセージを犬から取り上げなかったのが問題だと、警察は、そのことをしつこく訊くのです」

「……」

「確かに、隆介はソーセージを、一人で持ち出して寝室で食べていたということはある。でも、頸動脈迄犬が噛みますかね」

「わかりませんが、でも不思議ですね、飼い犬でしょう、突然襲うでしょうか」

「警察は、そんな事例があるらしく、実は夫が疑われています」

「本当にあるのでしょうか、犬に襲わせたとしてもいいのですか」

「そうです。犬を仕込んで、子どもに噛みつかせる。それも人命の急所を、襟首とか、お腹とか血管が出ている急所があるでしょう、そこを狙う。すると子どもは一時で絶命するらしいです。外国の本に書いてあるらしく、日本でも何例かある、というのです。ほとんど、それは犬で、小型犬でなく狩猟に使う、牙の鋭い犬がやると言われているそうです」

「じゃ、隆介は、その例と同じように、首の血管を噛み切られた、というのですか」

「わかりませんが……」

「ほんとうですか。まったく初めて聞きますね」

千佳は、急に自分の言葉に驚いたのか、「これはあくまでも警察署で訊いた話ですから」と言って帰ってい

った。

独りになった未知子は、ずいぶん恐ろしいことを聞いてしまったと、思った。そんなことが人間と動物の間に起こるだろうか、まして隆介が可愛がっていたのは彼の身体の半分ぐらいあるブルドッグである。ブルドッグはぬいぐるみにもある典型的な表情をしている。つぶれた鼻や垂れた大きな耳が特徴的で、怖さがない。男の子が好むタイプだ。

隆介はポコの顔が好きでよく抱きしめていた。自分の身体の半分ぐらいある背丈で、ポコは隆介の言う事ならなんでも聞いていた。例えば「靴を取って来い」と言えば、走っていくし、「お座り」と命令されれば、その通りにしていた。だから主人公は隆介だと思っていたのかもしれない。隆介にくっついて寝ている。その傍らに隆介の好みのおやつ、ソーセージがあってもおかしくない。

昼頃になって、病院から帰って来ていた三木に状況を尋ねると、隆介は意識不明の状態で、かなり深刻だということ聞いた。

「犬を飼っていたのが悪かった、仲良しだからいいと思つて一緒に寝せておいたが、犬に悪さされた」とい

う意味不明なことを言っている。例えばそのことが非人道的であれば、警察の説明を求められるであろう、と未知子は、不吉な予感がして胸が騒いだ。わざと犬にやらせたならば、それは三木の仕業である。彼が何気なく隆介とポコを仲間にし、ポコの仕業として隆介を亡き者にしたとすれば、問題は大きい。隆介が邪魔だと思つるのは、三木以外にいない。この行為が故意であつたならば、一番先に三木が疑われるだろう、と未知子は思つた。

(12)

隆介は、病院から家に戻らなかつた。出血多量で、亡くなつたというが、その状況から見て犬の噛みつき方と彼の体位に不信感が残つたようだ。例えば、彼の首に犬が好む鳥肉の臭いが残っていた。また、さらにどんな子どもでも噛まれた時、気付くはずだというのに、なぜ隆介は気づかなかつたか、その事から、彼は睡眠薬を飲まされていたのではないかという、疑いを残した。そして、三木は、彼の死を狙っていたのではないかという、嫌疑がかかった。隆介は、父親に多くの時間、面倒見てもらつていたが、彼に懐ついていた様子もなく、保育園側から見ると父親にびくびくして

いたという、マイナス情報も入っていた。

確かに未知子の池で遊んでいる時に、三木に呼ばれても、ほとんど振り向かなかった。家に帰るように催促されても、未知子の後ろに隠れてしまうこともあった。そんな時、三木は厳しい言葉で怒った。

「言うことを聞かないなら、ポコをけしにかけて噛みつかせてやる」という乱暴な言い方をした。まだ四歳の子に言う言葉ではない、普通なら、手をつないで帰るものを、そんな風景は一度も見えていない。もつとひどい時には、頭を押さえ「言う事を聞かないなら、迎えに行かない、一人で帰って来い」とも言ったこともある。

父親に強く言われても隆介は、父親に逆らえないのか、黙って、付いていった。

ある時、未知子は隆介がびっこをひいていたことがあった、ことを思い出した。

その時どうしたのと訊くと

「痛い」と言っただけを見てくれた。向う脛を打たれたような青あざがあった。

「どうしたの」と訊くと「お父さんが、言うこときかない、と言って叩くんだ」と言った。

「どうして」さらに未知子は、三木に怒りを感じて大

きな声で聴いた。

「だって僕が、お母さんと寝るといって抓るんだ。僕だって、お母さんと寝たいよ」

「そうよね、犬ばかりでは寂しいよね」

「お母さんが僕のところに来てくれないんだもの」

「お母さんが疲れて帰るから、かしら」

「昔は僕と一緒に寝ていたんだもの、今は、お父さんとばかり寝る」

「そうか、そんなこと、誰にも言えないよね」未知子は隆介の告げ口を聞くだけで、何にも助けられない自分が情けなかった。

「うん、だから僕は、お父さん嫌いな」

こんな会話をしたことを未知子は思い出す。隆介は、何かをずっと我慢していたのだろう、そのあげく、犬に噛まれて亡くなった、信じられない。

三木は、普段から隆介の世話を嫌がっていた。決して好んでやっていたのではないということが、周りの人の話で分かってしまったようだ。そこに殺意があったかどうかは分からないが、何らかの疑問は残る。

ポコを仕掛けて、隆介の首を噛ませる、そんな殺意があったとしたら、虐待死である。妻を迎え、結婚生

活をエンジヨイしようと思っていたのに、妻は、子連れで、それも四歳の男の子は、三木に反抗するし、決まっていた関係は結べていない。毎日毎晩、世話の見返りもなかったならば、「この子がいなければ」という思いにいたってしまったのだろうか。その殺意を実行するには、隆介が独りの時を狙う、それは夜である。手を加えないで殺害する方法、そこにはポコがいる。犬の力を借りるのという殺害手段を、具体的に練るようになった。

隆介の首に、ポコが好む食物の汁を塗る。それはどんなものだろうか。ポコの好物を考える。ポコが好きなものとは何だろうか。

いま思い起こすとポコは、鶏肉のソーセージが好きだ。それも、臭いの強いもので、鶏肉のソーセージをよく食べる。ソーセージを隆介がポコに食べさせる手段を考えなければいけない。隆介が食べているところをポコが狙う。ただ狙うだけではだめで、隆介に危害を加えなければだめだ。出来たら危害が人命の損失まで行きつく行為である。そして誰にも疑われない、自然な行為で隆介の死が期待できるもの、それはどんな手段があるだろうか。ここまで考えてきて、三木に思いつくことがあった。以前、三木は、ダックスフンド

を飼っていた、真黒なダックスフンドに齧られたことがある。それは、いつも通りに手の上にハンバーグを載せて、食べさせていた、そのハンバーグの臭いが、手のひらについていて、なめて終わりにするのだが、その時ダックスフンドはかなりお腹が空いていたのか、三木の指を齧った。結構深く傷ついて、治療をしたことがある。

その手を使おう、隆介の首にソーセージの臭いを付けることだ。そして首の近くにソーセージの切れ端を置く、そのためにはポコを空腹にしておく。夕飯をやらずに、隆介と寝かせる。隆介は、保育園から帰って外遊びをさせて、風呂に入れぐっすり眠らせる。眠る前に隆介に、ソーセージを食べさせる。おやつと言ってバター焼きしたものを食べさせれば彼は喜ぶ。犬と一緒に眠ることはいつものことだから、気にしない。やがて隆介は、眠りながらソーセージを落としてしまう。肩の近くに落ちたソーセージ、その臭いが隆介の首に付いているので、ポコは隆介に齧じりついた。ブルドッグの犬歯は鋭いから、血管迄届いてしまって、その結果、隆介の首、頸動脈が傷つき出血する。

その出血を見逃すことで、彼の命は、途切れる。病院で、隆介の死は確認された。死因は犬の咬みつ

きであった。

「犬歯で咬まれた頸動脈の出血死」と言う診断書が出た。その診断書は警察に届けられた。

三木夫婦は、その足で、警察に連行されて、取り調べを受けることになった。

(二〇二二・三・二五)